

幸いだ、平和を造り出す者たち

奨励	今野 寛【このの・さとる】
奨励者紹介	日本バプテスト同盟京都バプテスト教会牧師

平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

(マタイによる福音書 5章9節)

キリスト教との出会い

私がキリスト教徒になったのは大学生のときでした。東北学院大学というキリスト教主義の学校です。大学が、キリスト教主義であったことは、私にとって幸いでした。授業が難しくついていけない、劣等感や友人関係にも思い悩んで、心の病になってしまった経験があります。自己主張するのが下手で、友だちから本当の自分をわかってもらえない。自分の性格を何とか変えようと思ったのですが、変えようと思えば思うほど、だんだん自己嫌悪に陥っていました。絶望感におそわれ生きていけない、そのような思いがいたしました。夜になると金縛りにあうのです。寝ていると身体が動けなくなる。あれは本当に怖いですね。夜寝るのが怖かったです。

ある夜、怖さを紛らわすためにラジオを小さくして聴いていて、そのまま寝てしまいました。ふと目が覚めると夜が明けるところでした。ラジオから、小さな声が聴こえてきました。はじめは何の話かわからなかったのですが、世界にはたくさんの本があるというような話をしていました。まだ目が覚めやらぬままにそのまま聴いていると、その話は、聖書は世界のベストセラーだという話だったのです。ああ、キリスト教の番組かと思いました。大学がキリスト教主義の学校でしたから、礼拝のなかで聖書の話や、礼拝で語られることは真実だと思いつつ、信仰には至っておりませんでした。でもその放送を聴き終わって思ったのです。キリスト教というのは熱心だな、キリスト教では、信じれば救われると、そんなにまで言うなら信じてみようかと、そのときに思ったのです。それが、私が初めて神様に向かいあったときであったと思います。

大学2年の秋頃、学校の礼拝で、ある先生が「教会に行ったら人生が変わる」とおっしゃいました。そのことが私の心に留まりまして、それなら幼稚園のときに行ったことのある教会に参加してみようと思いました。最初に行ったのが夕方の礼拝です。かなり入りづらかったです。教会の門の前を行ったり来たり、行ったり来たりして、「今、入らなければ」と意を決して入った覚えがあります。そんな私を教会の人たちはあたたかく迎えてくださいました。それから、私は次の週から毎週、朝の礼拝にも行くようになりました。私が「ここにいていいんだ」と思えたからだと思います。教会に、私の居場所があったということです。

その年のクリスマスにバプテスマ(洗礼)を受けました。心のなかの不安、孤独というものへのなかにいた私でしたが、神さまと出会うことにより、本当に心に平安を得ました。心の病になったことは幸いことでありましたが、その経験がなければ、神さまと出会うことはなかっただろうと思っています。

け・ん・し・ん

その後、できればもっと深く神さまに献身したいという思いから、東京に出て、働きながら神学校で学ぶという体験をしました。日本聖書神学校という学校です。日本キリスト教団の認可学校で4年制の夜間の学校です。東京の目白にあります。東京で通っていた牧師のすすめもあって、そちらで学んだのです。お金もなかったので、働きながら夜間の学校で学ばせていただきました。しかし、私にとって神学校での学びは決して楽しいものではありませんでした。それまでの私の信仰は聖書を素直に読み、そしてイエスさまの罪の赦し、復活、蘇り、イエスさまがなさったさまざまな奇跡、そのことを素直に信じていた。今も、もちろんそうではありますが、神学校では、聖書を批判的に読むことを教えられました。そうすることが私にとっては大きな試練でありました。あたりまえと思っていた事柄に対しても、批判をするという訓練を受けたように思います。信仰というのは知識ではなくて、生きる拠り所、その人を支え、土台となっているものであるので、単純に批判したり、悪く言ったりというのは、よくないと思うのですが、私にとってこの学びは後々に役に立ったと思っています。神さまに支えられて社会のこと、社会の弱い立場の人たち、弱者の人たちへの視点を神学校で鍛えられたと思うのです。

3・11以降の生き方

省みまして2011年の東日本大震災、3・11以降、日本にはさまざまな問題が押し寄せているように思います。原発のことは、本当に深刻な問題だと思います。原発ゼロにするという民意が大半を占めているのに、政府は原発を推進しようとしている。沖縄のオスプレイ、沖縄に多く米軍基地を押しつけている差別行動もみえてまいります。ふってわいたような領土問題、TPPなど、さまざまな問題が、まるで津波が幾重にも押し寄せてくるように執拗に日本には降りかかっているのではないかと思います。しかしこの3・11以降、私たち日本人の多くは、これまでのあり方、生き方の物差しを問い直す機会になっているのではないかなと思わされます。日本は戦後、経済重視でやってきたと思いますが、経済だけでは幸せになることはできないと気づいたのではないのでしょうか。ニュースでEUがノーベル平和賞を受賞するというではありませんか。賞を受けるかどうかは別として、日本も世界においてそういう貢献をすることが求められているのではないかと。そういう平和的な貢献をすることが期待されていると思うのです。

先日、韓国の脱原発の活動家が来られて京都で講演をされました。彼は「日本がまず率先して脱原発を達成してください。日本がやらないで誰が、どこがするのですか」ということを訴えておられました。また台湾の学生で、日本に留学したことがある方が数年前にいらっしゃって「台湾につくられた日本製の原発で地域の人たちが苦しんでいる」と訴えて「日本が脱原発のリーダーシップをとってください」と話しておられました。日本は今、そういう意味で平和利用といわれている原発を廃絶していく、ゼロにしていって役割を担っているのではないかと、平和貢献のポジションにあるのではないかなと思わされております。

越えがたい壁・罪の発見

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」と聖書にはありますが、神さまはイエス・キリストを通して人となられた方であります。神であることを固執すべきことであるとは思わないで、人の姿の形になられて、人に歩み寄り、人となって、死さえも甘んじて人びとから捨てられ、越えられない障壁とは考えないで、聖なるお方が人となられた。なぜ神さまが人にまでなって苦しめばならなかったのか。私たちは自分のなかにある罪に気づく必要があると思うのです。自分は何も悪いことをしていない。犯罪などおかしていない、罪人ではない、そう思う方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちのなかに、内と外と分けて、内に対してはとても寛容な態度で接するのだけれども、外とみなした人びとに対しては見ないふりをしてしまう。そんな弱さがあるのではないのでしょうか。これまで私たちが見ないですごしてきた世界で起きているさまざまな悲しい出来事、現実というものがあります。気づかないふりをしてきた、それが罪だったのかもしれないと気づいて、神さまが人となられたように、私たちも越えられない壁はないと考えるべきでしょう。

なかなか困難なことではありますが、イエスさまが十字架におつきになったのは、他の誰のためでもない、私のために十字架についてくださったと思えるならば、主なる神さまは私たちの人生とともに歩んでくださり、そして越えられない壁を越えていく、そのような力を与えてくださると思うのです。

平和を造り出していく、そういう貴いものに私たちは預かっていると思います。この時代に私たちはどう生きるべきでしょうか。そのことを問い直したいと思います。